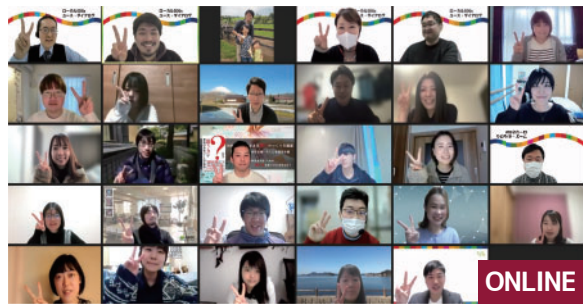




HOKKAIDO



ONLINE



FUKUSHIMA



NAGANO

ローカルSDGs ユース・ダイアログ ローカルSDGs キャンパス・ミーティング 開催レポート 2022年2月～4月



OKINAWA

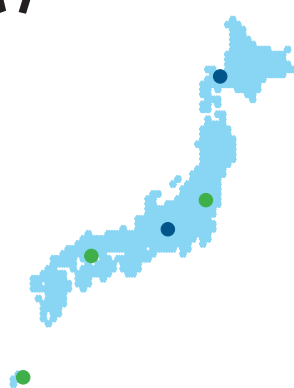


OKAYAMA

ローカルSDGs ユース・ダイアログ 18～30歳対象

- DAY1 2/20(日) 全体会(オンライン)
(北海道・長野合同)
- DAY2 3/5(土) 長野会場
3/12(土) 北海道会場
- DAY3 4/3(日) 全体会(オンライン)
(北海道・長野合同)

ローカルSDGs キャンパス・ミーティング 高校生・大学生対象



- 3/21(月・祝) 福島県(オンライン)
- 3/26(土) 沖縄県沖縄市
- 4/9(土) 岡山県倉敷市

主催：五井平和財団

共催：札幌市(北海道会場)、SDGsネットワークおかやま(岡山会場)

後援：日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、ESD活動支援センター、福島県、長野県、岡山県、沖縄県、福島県教育委員会、岡山県教育委員会、沖縄県教育委員会、長野市、小布施町、倉敷市、信州大学、長野県立大学、琉球大学、環境省中部環境パートナーシップオフィス(EPO中部)、岡山ESD推進協議会

協力：地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)、環境省北海道環境パートナーシップオフィス(EPO北海道)、NPO法人場とつながりラボ home's vi、子ども国連環境会議推進協会、NPO法人ezorock、株式会社起点、株式会社ITONAMI、プロジェクトマナティ、STARTUP LAB LAGOON

● 開催概要

昨年、環境省「令和2年度ローカルSDGs ユースセミナー業務」として、岡山県と滋賀県で実施した「ローカルSDGsユース・ダイアログ」を、今回は五井平和財団が主催し、北海道札幌市と長野県長野市の2か所で、オンラインを併用した3回連続セミナーを令和4年2～4月に開催しました。

本プログラムは、持続可能な開発目標（SDGs）に関心を持ち、あるいは既に各地で活動しているユース世代(18歳～30歳程度)を対象に、SDGsの達成や脱炭素社会、循環経済、分散型社会の実現に向けて、地域の特性と強みを活かしてサステナブルな社会づくりに貢献できるリーダーの育成を目的としています。

北海道や長野県を中心に地域の未来を担うユース世代合計22名が参加し、3日間のプログラムを通じて、SDGsの達成を目指す地域の未来づくりについて考え、ビジョンを共有し、学び合いました。そして、各自がこれから取り組みたいことの「種」を見つけて、各地域でサステナブルな未来の担い手になることを目指しました。

また、同3～4月には、高校生と大学生を対象に、地域でのSDGs達成に向けて学びを深める「ローカルSDGsキャンパス・ミーティング」を、福島県（オンライン開催）、沖縄県沖縄市、岡山県倉敷市で、順次開催しました。各会場には、SDGsについて知りたい、サステナブルな地域の未来のために何かしたい、と熱意を持った高校生や大学生が、3か所で合計57名参加しました。

参加者たちは各地の資源を活かして新たな価値を創造し、モノづくりを通して持続可能な社会づくりに貢献しているソーシャルイノベーターや、専門家の話を聴き、自分に何ができるかを考えました。

※各会場では、新型コロナウイルス等感染症対策ガイドラインに基づき開催しました。

ローカル SDGs（地域循環共生圏）とは

各地域が足もとにある地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、環境・経済・社会が統合的に循環し、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方であり、地域でのSDGsの実践を目指すものです。

● SDGs をリードする講師陣（敬称略）

| ユース・ダイアログ | | | | キャンパス・ミーティング | |
|---|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |
| 江口 健介 地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) | 齊藤 由香 アクティビスト・翻訳家・通訳・ワークショップファシリテーター | 井澤 友郭 こども国連環境会議推進協会 事務局長 | 大宮 透 小布施町 総務課長 | 酒井 悠太 株式会社起点 代表取締役 | 金城 由希乃 プロジェクト マナティ 代表 |
|  |  |  | |  |  |
| 草野 竹史 特定非営利活動 法人ezorock 代表理事 | 佐竹 輝洋 札幌市環境局 環境都市推進部 環境政策課 環境政策担当係長 | 谷崎 テトラ 作家・構成作家・京都芸術大学 客員教授 | | 島田 舜介 株式会社ITONAMI 代表取締役 | 河野 晋也 大分大学 教育学研究科 教職開発専攻 (教職大学院) 准教授 |

ローカルSDGsユース・ダイアログ (18~30歳程度のユース世代対象)

長野県と北海道で開催された「ローカル SDGs ユース・ダイアログ」は、1 日目はオンラインの全体会、2 日目は各地域にて対面開催、3 日目はオンラインの全体会という全 3 回プログラムで行われました。ファシリテーターもユース世代が担い、プログラムを進行しながら参加者としてワークに加わり、共に学び合うスタイルで実施しました。

プログラムの目的

- 「学ぶ」 SDGs や地域の実践例を学ぶ。
- 「つながる」 同じ志を持つ仲間と出会い、自分の原点や仲間とつながる。
地域でつながり、地域を超えてつながる。
- 「描く」 地域を含む未来についてユース世代と共に考え、ビジョンを描く。
- 「見つける」 自分の可能性に気づき、取り組みたいことの種を見つける。

DAY1 (オンライン)

全国の仲間と出会い、SDGsを学ぶ

初日は、オンライン会議システム Zoom を使い、北海道・長野合同で行いました。

冒頭、全員でプログラムの目的や進め方、3 日間のローカル SDGs の「旅」を有意義に過ごすためのグラドルールなどを確認して足場を揃え、アイスブレイクや自己紹介を行い、互いに心をゆるませていきました。

そして、3 名の講師による SDGs を学ぶ講演、ワークショップへと移りました。

一人目の講師、地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) の江口健介氏は、「地域循環共生圏 (ローカル SDGs) の実現に向けて」というテーマで、地域の活力が最大限に発揮されるための大切なポイントや各地域で生まれている優良事例、また私たちは、SDGs が国連で採択された 2015 年以降、激動の世界を生きており、人類と地球の未来は若い世代の手の中にあると語りました。

続いて、米国パークレー在住のアクティビスト、齊藤由香氏が「海外のサスティナビリティアクション」と題し、米国の事例を中心に、「Think Locally, Act Globally (地域レベルで考え、地球規模で行動する)」という発想に基づく地域の活用やコミュニティの力、コモンズ (共有資源) と呼ばれる概念を紹介しつつ、様々な社会的課題を共に問い合うことの大切さなどについて語りました。

最後に、こども国連環境会議推進協会事務局長、井澤友郭氏が、「SDGs とはなにか? ~ 私たちの選択が未来を変える」というテーマで講演。SDGs が「誰一人取り残さない」世界の実現という目標であり、社会課題を分析する 17 の視点であるということ踏まえ、日本と世界の現状を正しく知り、今まで当たり前とされてきたことを鵜呑みにせず、より高い解像度で問い続けること、また、行動だけでなく、価値観を変えていくことの大切さについて、ワークショップ形式で学びました。

参加者たちは「地域の資源を生かすことが重要」「本当の豊かさや便利さとは何か問い続け、価値変容をしていくことが必要」「SDGs は複数の事柄が複雑に絡み合っている。一つを解決すれば済むものではないことがわかった」など、感想を述べました。



Made in wordcloud.jp.com

気づきをワードクラウドで図示

**DAY2（長野会場
／北海道会場）**

**地域の仲間とつながり、事例を学び、
取り組みたい「種」を見つける**

2日目のプログラムは、それぞれ長野市、札幌市にて、対面形式で行いました。

初日のプログラムを振り返り、アイスブレイクの「絵による伝達競争」でお互いの緊張をほぐした後、「今大事にしているテーマや活動に出会った経緯や夢中になっていること」「参加の動機、SDGsに関心がある理由」「チャレンジしたいこと、悩み、課題」という3つのテーマで、小グループになって、じっくりと語り合いながら、一人一人の魅力を見える化し、仲間たちとつながっていきました。

その後、未来づくりのヒントとなるよう、10年後何が起きているか多様なテーマから展望し、自由にビジョンを描いていきました。

ワクワクするような10年後の未来像 = シェアドビジョン（抜粋）

- 私：「起業家」「自由な働き方」「世界中を飛び回る」「パスポート無しでの海外旅行」他
- テクノロジー・ビジネス：「自然とデジタルのゆるやかな融合」「自動運転の乗り物」他
- 教育：「長所をのばす教育」「地方でも最先端の学びを」「ベジタリアン向け給食」他
- 地域社会：「産学官連携」「空き家スペースが8割実用化」「シェアリング経済」他
- 社会問題・地球環境など：「障害者への理解の深まり」「エネルギー自給率150%」「戦争がない平和な世界」他



仲間の話を傾聴し魅力を書き出す



グループで10年後の未来像を共有

未来のビジョンを描いた後は、参加者がそれぞれにチャレンジしたいことや自分の取り組みたい「種」を見つけるヒントを得られるよう、「地域におけるSDGsの実践例を学ぶ」というテーマで、地域で持続可能な社会づくりに取り組んでいる有識者による講演がありました。

【長野会場】講師：大宮透氏（小布施町総務課長）

「まちづくりの先進地」として注目される人口約1万1千人の町の「ごみゼロ」「脱炭素」を目標に掲げる環境政策や、地域での取り組みの可能性や課題などについて、町の事業を紹介しつつ、「社会課題を一番近い現場で解決していく」と行政の世界に飛び込んだ自身の思いや国内外での様々な体験談も交えて語りました。

【北海道会場】講師：佐竹輝洋氏（札幌市環境局環境政策担当係長）／草野竹史氏（NPO法人 ezorock 代表理事）

対談形式で、市の環境政策の推進役の佐竹氏と、多くの人を巻き込みながらゴミ問題などの社会課題解決に取り組んできた草野氏が、行政とNPOの連携を通じた持続可能な社会づくりや、若者たちの役割、環境教育のあり方などについて語り合い、参加者と対話しました。

DAY1 から続いてきた一連のワークや学びを経て、参加者達は「自分の原点」「多様性との出会い」「世界・地域の未来」の3つのポイントを振り返り、静かに内省し、思いついたアイデアを書き出しながら、自分を取り組みたい「種」を発見していきました。

その後、グループ内でお互いの「種」を共有し、どのように一步を踏み出すかを話し合いました。

チェックアウトでは「『多様な存在が大切にされる社会をつくりたい』という講師の思いに共感した」「このメンバーと地域のために何かやってみたい」「すべてのアクティビティが多様な意見を受け入れる温かさがあり、充実した時間を過ごせた」など、感想を述べました。

■ 参加者たちが見つけた「種」(DAY3 までに試してみたいアイデア)

- 自分が得た情報やSDGsに関する問題点などを周りの人たちに伝え、意見を聞く。
- 自治体が直面する地域課題についてより知識を深めたい。
- 環境に関心がない人も巻き込める場づくり・イベントを企画する。
- 個人でどんなエネルギーがつけられるか調べてつくってみる。
- 自然環境の保全のためにできることを10個考えて、1つ実践する、他。

DAY3 (オンライン)

全国の仲間と再び出会い、歩み出す

最終日は、北海道と長野の仲間がオンラインで再び出会い、3日間を通して得た学びや気づき、「自分の種」を胸に抱きながら、新たな一步を踏み出しました。

メインプログラムとして、構成作家・京都芸術大学客員教授の谷崎テトラ氏が「持続可能な社会の実現に向けて」というテーマで講演。



谷崎氏は、「SDGsの本質とは？」という問いかけから始まり、種は「自分の心の動き」にあること、また、地球環境、社会、人の心で起きている3つの危機に、世界が直面している現状について、様々な課題を紹介し警鐘を鳴らしつつ、人類が宇宙から地球を眺めるような「惑星意識」に目覚め、「20世紀の思考」から「22世紀の思考」へと転換する必要があると訴えました。そして、アースデイなど自身の取り組みを例に、参加者たちに「小さなタネを大きく育てよう、想いをカタチにしよう」と呼びかけました。

谷崎氏の講演後、参加者からは「現在の地球に起きている危機を様々な角度から知ることが出来た。自分の大事な種を育てつつ、持続可能な社会に向けて、出来ることから少しずつ取り組みたい」「ポジティブなアクションを呼びかけるアースデイの理念に感動した」などの感想が聞かれました。

■ 参加者の声 (抜粋)

- まずは小布施を訪問し、様々な活動をしている方と繋がり、一緒に何かをしたい。
- アート×SDGsの観点から、札幌で若者を対象にしたイベントをやりたい。
- 自らの現在地を確認し、次に進むべき方向を見定める貴重な機会となった。
- 価値変容とはどういうことかピンときたのが大きな収穫だった。プログラム全体を通して自分を振り返る、自分の現状を知るととても良い機会となった。
- 共感も驚きも応援もたくさんあった3日間だった。出会いに感謝。
- 多様なメンバーの価値観、視点、立場から、人間の多様性を教えてもらった貴重な時間だった。
- これまで環境にあまり関心なかった人を巻き込み、地球規模の視野で活動していきたい。

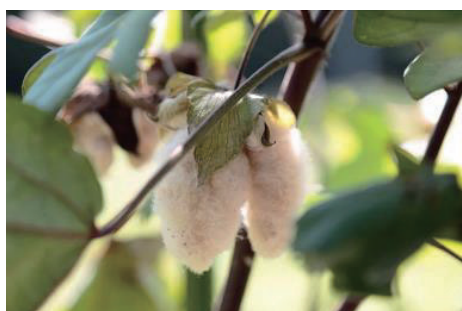
福島会場（オンライン）「オーガニックコットンで地域経済を循環させる」

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、会場がオンライン開催に変更となったことに伴い、福島県内だけでなく、北は秋田県から南は沖縄県まで、全国各地より参加者が集まりました。

株式会社起点代表取締役の酒井悠太氏が、2011年の東日本大震災が人生の最大の転機となり、瓦礫の山を前に生きる意味を自問自答した結果、地元福島で多くの試行錯誤や苦労を重ねながら、全くの未経験から有機栽培のオーガニックコットンの生産に取り組むことになったきっかけや、起業して様々な人々と連携し、Tシャツや手ぬぐいなどの商品開発や販売を通じながら、福島の復興に取り組んできた自身のエピソードや、日本ではオーガニックコットンの認証制度がないので、海外の認証団体から認証を取れるよう、今チャレンジしていることなどを紹介しました。最後に、素直な感性を持ちながら、思い立ったらやってみることで、その経験が後の財産になる、と参加者たちに語りかけました。

参加者からは、「オーガニックコットンの生産・製造の工程から環境保全、地域資源の活かし方、経済を考えた製品づくりなど全て勉強になった」「風評被害で食材を食べてもらえないため、食べ物以外で何か

かできることはないかとオーガニックコットンを考えたという話はすごいと思った」などの感想の他、オンライン開催により、地域を越えて「違う学校の人と話し合いをする機会があって嬉しかった」などの声も聞かれました。



福島産オーガニックコットンとコットン畑（写真：起点）

沖縄会場「サンゴに優しい日焼け止めで海を守る」

プロジェクトマネティ代表でエシカル起業家の金城由希乃氏が、サンゴ礁の保護やビーチクリーンなどの活動について紹介しました。

「海の森」とも呼ばれるサンゴ礁は、小魚の住処としてだけでなく、二酸化炭素を大量に吸収し、自然の防波堤の機能も併せ持ちます。あるダイバーから、そのサンゴ礁が日焼け止めに含まれる成分で白化と呼ばれる死滅や衰退の原因の一つになっている点を指摘され、その事実衝撃を受け、自ら「サンゴに優しい日焼け止め」を開発し、普及・啓発活動を行ってきました。

更に、活動を通じて、ビーチの漂着ゴミ問題とも出会い、その課題解決のため、地域の商店などと連携して、観光客と地域住民がコミュニケーションを図りながらビーチを清掃する優しさの連鎖の仕組みを、プロジェクトマネティへと成長させました。

最後に、金城氏は「未来は若い人のもの。自分たちが創りたい未来を創造していけば、その未来がやってくる」と参加者たちに語りかけました。

金城氏の行動力や情熱に触発された参加者からは、「地域や人のつながりを意識したマネティ活動はとても良い」「日常生活で環境に悪影響を及ぼす行為をしていないか見直す必要があると思った」「自分も金城さんのように、失敗を恐れず少しずつ行動していきたい」「サンゴが白化現象であると知ったので周りに伝えていきたい」などの感想が聞かれました。



沖縄のサンゴを取り巻く現状について解説

岡山会場「アップサイクルデニムで人と人をつなぐ」

株式会社 ITONAMI 代表取締役の島田舜介氏が、デニム産地として有名な倉敷市児島におけるデニム業界の課題を改善すべく「人・モノ・人の間を育むデニム」と題して、自身のデニムブランドを立ち上げたきっかけや、キャンピングカーで全国を行脚しながら人々に作り手の想いを伝えてきたエピソード、「泊まれるデニム屋」をキャッチコピーに掲げたホステルのオープンなど、アパレルブランドの枠を超えた、地域産業の持続可能な発展や新たな時代の価値創造への取組みについて紹介しました。

「愛着を持ってモノを大事に使う意識を育みたい」という想いを大切にしながら、全国のお客さんに種からコットンづくりに関わってもらい、実ったコットンも使った製品を製造する他、不要になったデニムの回収や再生に取り組んできた島田氏の講演に、皆、聞き入りました。



講演の感想を語りあう参加者たち

最後に「自分のやりたいことを信じて進むことで広がり生まれてくる。関心を持ったことには、どんどん挑戦してほしい。」と参加者たちにエールを送りました。

参加者からは、「人の想いとつながり、その成果を社会に還元している生き方や想いに触れることができ有意義な時間だった」「活動の根底に『作り手の思いやどうやって作られているかを知って欲しい、ものを大事にして欲しい』というマインドがあることを知り感銘を受けた」「島田さんの願いは SDGs の達成に必要な考えだ」などの感想が聞かれました。

■ SDGs ナビゲーターによるトーク

各会場講師のトークを受け、大分大学教職大学院の河野晋也准教授が、「身近な地域で考える SDGs」というテーマで、大量生産・大量廃棄するファストファッションや、飲み物の容器の素材の選択などの題材を取り上げ、普段立ち止まって考えることの少ない、私たちの判断基準（価値観）と地球規模の課題とのつながりについて解説しました。

参加者からは「身近な話題から SDGs の話題についてつけていたのが分かりやすかった」「一つ一つの小さな選択が未来へとつながっていることを知り、自分の生活スタイルを見つめ直すきっかけとなった」などの感想が聞かれました。



■ 参加者の声（抜粋）

- 社会がより良くなるために、一人一人の選択が大切だと学んだ。情報を発信して、どんな人とでも協力することが未来の社会を切り開く第一歩になることを胸に刻もうと思った。
- 「何かアクションを起こしたい！」と思っている人たちを全力で応援し、サポートしてくれる存在や、SDGsに興味を持ち、様々な経験を積み重ねたいと思っている同世代の人たちが他にもいることを確認することができ、とても大切な時間となった。
- 全く異なる背景を持ち、異なる意見を共有することで新たな考えに気づける時間だった。まさに「多様性」を実感できるひと時だった。

編集・発行：公益財団法人 五井平和財団
〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-4-5 平和第1ビル